

吉川竜実著

『千古の流れ―近世神宮考証学―』

紹介

弘文堂 平成二十八年七月 A5判 五四〇頁 本体七五〇〇円



本書は、「延暦儀式帳」の選進以来開始された「神宮学」に根差し、「本居宣長の国学を積極的に採り入れて中川経雅が樹立し、なかがわねだ 蘭田守良が継承、そのだもりよし 足代弘訓や橋村正兌が発展させて、あじのひろのり 御巫清直が大成させた近世「神宮考証学」を研究対象としている。とりわけ、『皇太神宮儀式帳』の註釈書『大神宮儀式解』を物した中川経雅と、幕末維新期に神宮の古儀復興を実現せしめた御巫清直とに焦点を絞り、彼らが考証学を志した背景、具体的な考証内容、更には周辺学者との学的交渉関係等を、それぞれの碩学の足跡を具に辿りながら立論した力作である。

全五百四十頁に及ぶ大著であるためその全貌を網羅出来ないが、筆者がとりわけ感銘を受けた論文の一つは、第二編「第一章 経雅の『大神宮儀式解』執筆」である。従前指摘されてきた『大神宮儀式解』執筆の動機を、「経雅が禰宜の職務を遂行するにあたり、その規範や本義を追及するのに典拠となり得る唯一の根本資料として

神宮最古の書『皇太神宮儀式帳』を想定し、この書を研究しその真価を見極めることよつてのみ自己の職責を全うできるとした決意にこそ求められるべき」と喝破する。更に、『大神宮儀式解』の記述法が宣長の『古事記伝』稿本に準拠していたことを確認し、かかる記述法が後に展開する「神宮考証学」に通底していたことを指摘する。第三篇「第一章 清直の神宮観」では、御巫清直の考証学の根底に、「神宮＝神朝廷」思想を見出し、当該思想が神宮の様々な故実を明らかにする上で、大きな判断基準となつていたことを論証する。

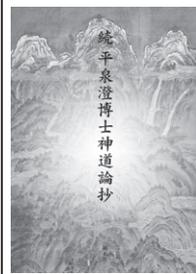
いずれの見解にも通底するのは、研究史資料を広範に渉猟し、それを正確に読解、そして堅実な考察を加えたことの帰結であるということであろう。その意味で、本書自身がまさに「考証学」と呼ぶに相応しい内容となつている。

平泉澄著・日本学協会編

紹介

『続 平泉澄博士神道論抄』

錦正社 平成二十八年八月 A5判 三三〇頁 本体三五〇〇円



戦前・戦後を通して、皇国の護持に努めてこられた歴史学者・平泉澄博士。その全活動の基底には、博士独自の神道論・神道観があり、それを知ることなくして、博士の活動を理解することはできない。ここに、去る平成二十六年に編集・刊行された『平泉澄博士神道論抄』の続編が刊行された。本書は、正編には収録されなかった論文・講演記録等十六篇をまとめたものであり、本書の刊行によって、博士の神道論・神道観が、より多角的に把握できるようになったことの意義は大きい。

本書は三部より成る。第一部「序論」は「神道と国家との関係」と題されている。博士が生涯にわたって追究してこられたテーマの一つで、歴史上の具体的な事例を引き合いに出して論じている点に、歴史学者としての博士の真骨頂が見られる。第二部「前篇 神道史上の人物」には、博士が探究し続けてきた菅原道真・明恵上人・北畠親房・山崎闇斎・遊佐木斎・谷泰山・佐久良東

雄・真木和泉守を題材にした人物論九篇を収録。それだけの人物論から、博士の深い敬慕の念を窺うことができるとともに、熱烈な信仰に生きた人々を、立場の如何にかかわらず等しく評価し、その姿を余すところなく描き出している、読み応えがある。第三部「後篇 神道をめぐる諸問題」には、著者の関心が深かった問題を扱った七篇が収録されているが、とりわけ宮座を論じた「神社を中心とする自治団体の結合と統制」は、博士の名著『中世に於ける社寺と社会との関係』（至文堂、大正十五年）と併せて読まれてもよいであろう。

なお本書には、博士が谷省吾教授に宛てた書簡の一節が紹介されている。それは「神道は国家の保護を希求すべきでなく逆に国家の護持を念願とすべき事」ほか四箇条。なかには神職たる者の資質にまで言及されており、「著者一生の研究の帰着点」（序）として、また本書全体を貫くライト・モチーフとしても注目される。

三宅守常著

紹介

『三条教則と教育勅語——宗教者の世俗倫理へのアプローチ——』

弘文堂 平成二十七年六月 A5判 三四三頁 本体五〇〇〇円



明治の宗教者（とりわけ仏教者）たちは、自らの立脚点とする宗教的境涯と、世俗倫理との結節点をどのように見出したのか。これを、明治国家の〈倫理指針〉とも言うべき「三条教則」と「教育勅語」の衍義書（解説書）の分析を通して解明したのが本書である。「三条教則」「教育勅語」とも、歴大な数の衍義書が刊行されているが、著者三宅守常氏は、日本大学精神文化研究所・同教育制度研究所編『教育勅語関係資料』全十五巻（創文社、昭和四十九年～平成三年）、明治聖徳記念学会編『三条教則衍義書資料集』全三巻（明治聖徳記念学会、平成十九年）の編集に関わり、両衍義書の研究では第一人者と言えよう。本書は全三編。第一編「三条教則と仏教僧」では、仏教僧による「三条教則」衍義書が考察される。大きく神道の解釈に従属的な「追随型」、各自の教義的立場を区別しようとする「区別型」（その変則型である「信仰信念貫徹型」を含む）、神仏の融合を主張する「会通型」、神道

に批判的な「批判型」の四類型が見られることを提示し、仏教側にとつて「三条教則」が押しつけであったとする通説が成り立たないことを論じる。第二編「教育勅語と仏教僧」では、主に真宗僧の「教育勅語」衍義書が取り上げられ、伝統的宗乗の立場から解釈する「第一類型」、宗教一般から解釈する「第二類型」、通仏教的な立場から解釈する「第三類型」を提示している。同じ真宗僧でも決して一枚岩ではなかったことを明らかにしている。第三編「教育勅語と宗教者」では、明治期の石門心学の動向と、石門心学とロシア正教の立場からの「教育勅語」衍義書を考察することにより、当時の精神界、また仏教者以外の宗教者が、「教育勅語」にいかに対峙したかが論じられる。

個々の衍義書への興味も然ることながら、全編を通して通説を打破せんとする意欲が横溢しており、刺激に満ちた一冊である。